

マンボウ おもち

北 杜 夫



ポンボウおもちゃ箱 北杜夫



新潮社



マンホウおもちゃ箱

一九六七年九月二十五日 印刷
一九六七年九月三十日 発行

定価 三〇〇円

著者 北 杜 夫

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(總)二二二番(大代)
振替 東京 八〇八番

印刷 二光印刷株式会社
製本 新宿加藤製本所

(落丁のものは本社又はお買求めの
書店でとりかえいたします)

・マンボウおもちゃ箱・目次・

1 短い話、長い話

陸魚 八

買物 二〇

2 女のいる風景

スリと亭主 三六

男の買物、女の買物 三七

季節外れの話 三九

自転車に乗る女 四三

新婚旅行 四五

近ごろの姑 四六

果汁の話 五一

レディ・ファースト 五四

ダメなパパ 五五

母の味 五九



軽井沢の夏 三
女の子の味 三

3 お金についての閑話

五円玉まかり通る 七

一銭と一円 七

株こわい 八

小銭への愛憎 八

ギャンブルのこと 九

金貨ジャラジャラ 九

4 食後の閑話

タイム・マシン 一〇

皮膚感覚 一〇

幼少時の教師 一〇

「近接ヲ防止スルヲ要ス」 一〇

蛾の美しさ 一一

ビショップ博物館 一二



5 躁病、鬱病

- 子供の本のこと 二九
- 公園 二三
- スポーツのこと 二四
- 温泉 二三
- 自動販売機など 二五
- 幻想の味 二七
- 国語辞書の話 二〇

梅崎氏のギックリ腰 一四

長編を終えて 一六

躁病その後 一三

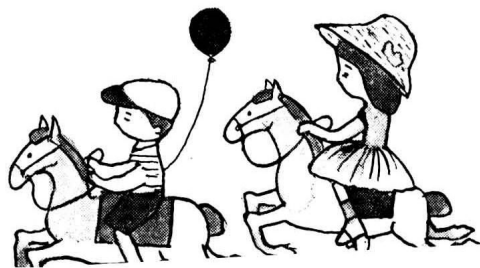
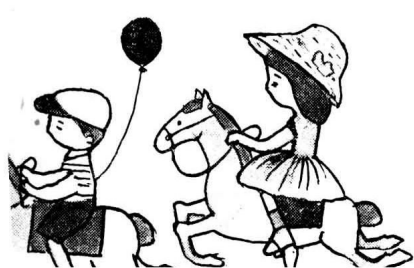
私は鬱病である 一六

傲慢と韜晦 一〇

無為徒食 一七〇

6 困った話

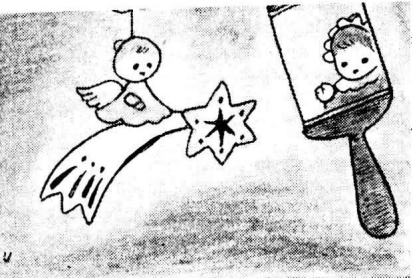
マンボウ親バカ記 一八



素人の弁	一六
初めての本	二〇〇
自分の本	二〇三
出版記念会	二〇五
ひと忘れ	二〇八
賀状	二一〇
手紙のこと	二二三
電話のこと	二二六
テレビのこと	二二九
薬の広告	二三三
夫と妻	二三三
雀	二二六
専門家	二三七

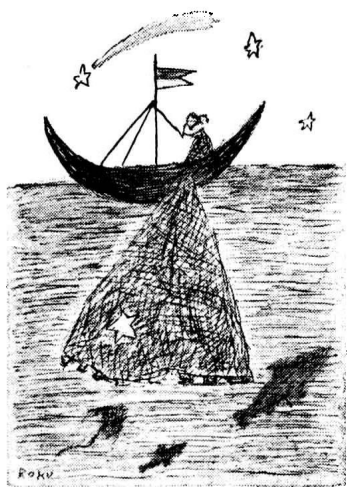
・装幀、カット・谷内六郎・





・マンボウおもちゃ箱・

1
短い話、長い話



陸魚

海辺は今日もおだやかだった。

藍色の目をした子供がいう。

「だけど、オバケなんて、ほんとうにいるものかなあ」

彼は疑わしそうに、新式の水中銃をひらひらとふった。夏休みのために、前日買ってもらったばかりなのだ。

「もしオバケが出てきたら、ほく、これで射ってやる」

「そんなものに立たんさ」

と、大柄な子がいった。彼はトビ色の目をしていた。

「陸の、ずっと奥にいるんだもの」

「どんなオバケが？」

「一つ目なんてやつがいる。そいつは、目が一つしきやないんだ」

「ウソだい。一つ目なんて」

「だけど、もし一つ目が出てきたら？」

「そんなもん、いっこないよ」

「一つ目はあやしいとしても」と、大柄な、トビ色の目をした子供はいった。「陸魚はたしかにいる」

「ウソだい。それも伝説だい！」

「だが、もし陸魚が本当に出てきたら？」

藍色の目の小柄な子は、おそろおそろ陸地を見やった。真赤な砂浜、そのむこうにつづく白い森。そこまでは彼らは行けない。あの奥ぶかい森のどこかに、陸魚が本当に隠れているのだろうか？

藍色の目の子は、びくつきながら考えてみた。陸魚はおどろくほど早く陸地をかけるそうだ。もしあの森から陸魚が出てきたら、ほくは大急ぎで海に逃げる。だが、陸魚はいくらかは泳ぐというではないか、ほくより早いかしら？ なによりも、絵本で見た陸魚の形態が、心底から彼をおびやかした。いくらオバケだとはいえ、それはあまりに恐ろしい姿だった。ふりあげた二本の手、そこに鉤のようについた五本の指、すっくと立った二本の足、なによりも、ランランと輝く二つの目。

「帰ろう。もう帰ろう」

と、幼い子は泣声をあげた。実際、彼の顔はくしゃくしゃに歪んでいた。

「大丈夫さ。陸魚なんていやしないんだよ」

大柄な子は言って、それでもやさしく藍色の目の子の肩を撫でた。

それから二人の子供は、三本ずつの手足をひらひらと動かし、八つの目で水中を眺めながら、

沖の方へ泳ぎはじめた。じきに彼らは水中にもぐった。彼らの家のある、アルファ・ケンタウリ星の茶色の海の底へ。

買物

私はひとつの遊びをした。その男を、精神病者ではないと決めてやったのである。

私はある公立の精神病院に勤める医者である。およそ四百五十人の精神異常者がこの病院に入院している。そして、院長を除いて医者の数は六人。それも大学から週二日だけ勤務している医者もあるから、私たち常勤が受持っている入院患者は一人につき百名にも近い。

これは情けない状態である。私たちは外来診療もすれば、ある程度の研究の時間も持たねばならぬから、入院患者の回診はごく大ざっぱになる。かりに少し念入りに一人ずつ呼びだして問診をすると、まず一日にせいぜい五名がいいところだ。受持の患者を一通り診察し終るのには一カ月かかる。言いかえると、入院患者は一カ月に一遍しか担任の医者からくわしい診察を受けられないということだ。

そんな事情で、決して精神病者でない——と私は信じた——その男、三喜田がこの病院に閉じこめられていたことも、あながち不思議ではないのだ。

三喜田は、私の患者ではない。病名は精神分裂病の妄想型パラノイド・フオルムということであつた。この妄想

型ほど、場合によって診断に困るものはない。なぜなら、病者はある一つの妄想を抱いているが、その他の知性は少しも損われず、いわば正常人といつてよいからなのだ。たとえば一人の女がいて、ある婦人科の医者から暴行を受けたと主張するとする。これが実際のことなのか、それとも妄想なのか、第三者は判定を下すことはむずかしい。だが、よくよく聞いてゆくと、その女はあちらでもこちらでもやたらと暴行を受けており、それがこの世の常識から逸脱していることがわかってくる。大体荒唐無稽なことが多いのがこの病気の特徴で、あたしは皇太子の恋人なのよとか、おれはエリザベス・テラーの夫であったことがあるとか、そのような主張をすれば、これはやはり病院に入れられてしまつても仕方がないであらう。

さて、三喜田の妄想は、タイム・マシンをこしらえ得るという点にあった。正直にいつて、純粹にこの点にのみ関していえば、これが病的か否かはわれわれには判断を下し得ない。だが、彼を病院へひっぱつてきた某大学の助教授が、タイム・マシンというものはそもそも荒唐無稽のものであり、決して実現されないもののだと述べた以上、彼は病的であると判断され、入院させられる羽目に陥つたのだ。三喜田は三十歳を越したばかりの物理学教室の助手だが、勝手に教室の資料を使って面妖めんような機械を組立てはじめたというのである。

彼を妄想患者として受け入れた病院側としては、三喜田をそれほど珍奇な症例とは扱わなかつた。病者のもつ妄想、あるいは幻聴というものは、時代に鋭敏に反応するものである。よく他人から監視されるという被害妄想があるが、むかしはその架空の犯人が天井裏などにひそんでいると訴える患者が多かつた。ところがテレビが普及してくると、テレビに写されているという訴え

が多くなる。放射能をかけられるという訴えもある。自分が宇宙人だと称する男もある。ちかごろSFとかいう小説が流行したときが、そういう世界をいち早くとりいれているのは精神病者だともいえるかも知れない。従って、タイム・マシン製造者の出現も、それほどおどろくべきものではなく、せいせい医局で笑い話の種にされるくらいであった。

といって、私はやはりその患者、三喜田に関心を持った。なぜなら、私自身も地道な研究というのが苦手で、一か八かの発明などをしたがる習癖があるからである。一度はショックリ療法というのを発明したが、失敗してしまった。精神病の治療としては、インシュリン療法にしる、電気治療にしる、一種の刺戟療法である。そこで私は横隔膜に強烈な痙攣をひき起す薬物を投与し、人工的な猛烈なショックリを起させた。私の理論としては、その患者は良くなった筈だと思うのである。ただ惜しむらくは、間断ないショックリが未だにとまらないので、果して良くなったかどうかを問診することが不可能なだけだ。この事件のため、私は医局長にえらく叱責された。私は名譽を回復しようと、次には中に人間がはいれるくらいの巨大なコイルを作ってみた。中に患者を入れ、電流を通じた。この場合も患者はたしかに良くなったのだと思う。ただコイルから出す場合に、患者はハシゴを踏み外して転落し、頤の骨を折ってしまい、やはり口がきけなくなってしまった。医局長は私に二度と新しい実験をやってはならないと激怒したが、なに患者はたしかに良くなっているのだ。なにしろそのコイルは右巻きに巻いてあるのがミソなのだから。こんなふうに発明家の素質のある私が、タイム・マシンを作るといふ患者に興味をもったのは当然であろう。そんなものが実現されるとはもとより私も考えない。だが、空想としてはいかに

も楽しいではないか。タイム・マシンがあれば、ちょっと百年後の世界へ行き、進歩している精神病の治療機械なり薬なりを持ってこられる。そのときの、あの憎らしい医局長の顔を想像するだけでも愉快だ。

三喜田は偶然その医局長の受持であつたが、私は医局長の留守に彼に会つてみた。痩せて頬のこけた私と同年輩くらいの青年で、なんとなくほんやりとした顔をしていた。

クロール・プロマジンという妄想を直す薬品を大量に飲まされているのであろう。

「いくら薬を飲ませたつてダメですよ」

と三喜田は、白衣を着た私を見て、いきなり言つた。

「ほくは病氣じゃないんだから。あの薬をのむと眠くなつてかなわん。こんなことしていると本物の氣ちがいになりそうだ」

この彼の言葉からは何も得ることはできない。本物の狂人であつてもたいていこういうことを言うし、万一正常人であつてもおそらくこのような台詞を吐くにちがいないからだ。

だが、私は彼を見て、直感的になにかを感じた。一体に狂氣と正常との差はどこにあるのか。

ある時代の、最大多数者が正常とされるのではないか。たとえば中世の魔女妄想の時代、魔女を信じていた者のほうが正常であつた。そうでなくとも、狂氣の極端から正常の極端（妙な表現だが）を順々に並べてゆくとしたら、その中間に境界線を引くことは明らかに困難だ。だが私たちは典型的な狂人を多く診てきている。典型的な妄想患者を見れば、どこがどうとははっきり言えないが、第六感でピンとくるものがある。こいつは狂人だ、ということが世間の人よりは遙かに

容易に直感されるのだ。

三喜田の顔つきを見、その声を聞いたとき、狂人臭いなものかが私には感じられなかった。私は彼を私室に連れて行って、紅茶をのませた。病氣のことには何も触れなかった。私も発明が好きなので、物理のことなどを教えて貰いたいと言った。そうして無駄話をしているうちに、三喜田の警戒心は徐々にゆるんできて、かなり雄弁になり、病院に入れられてからはじめて人間なみの待遇を受けたといつて笑顔まで出すようになった。私はときどきそれとなく質問した。磁場とかエントロピーということについて。答は非常に明確で、少くとも彼の知性は少しも損われていないことを証していた。もっとも肝心の問題が妄想かどうかということが残っている。

「ところで」と私は訊いた。「あなたはタイム・マシンを作れるそうだが？」

「多分ね」と、三喜田は曖昧にニヤリと笑った。

「それはどういうんです？ いや、時間というものはどういう構造になつてゐるんです？」

「時間？」と三喜田は言つた。「時間について正確に解説できる学者は、現在では地球上にいません。はっきり言つて、ほくにも全然わかりやしません」

「でも時間の本質がわからなくて、タイム・マシンができますか？」

「あなた達だって」と、三喜田はまたニヤリとした。「精神病の治療を、何にもわからない癖にやっているじゃありませんか。電気ショックだって、単に効果があるということがわかつているだけで、その作用機転は不明だそうじゃないですか」

「ある程度はわかっていますよ。仮説の形ですがね」と私。